

Thoreau's *Walden* の Paradox の意味するもの

鶴 木 奎 治 郎

- I Thoreau に於ける矛盾した表現
——価値判断と事実判断又は男らしさと女らしさ——
- II Thoreau に於ける矛盾した表現の現代的形態
 - (A) 経済
 - (B) 生活
 - (C) 孤独と社交
 - (D) 読書と科学
- III Thoreau 思想の現代的意義
 - (A) Pragmatism
 - (B) 倫理的 Pragmatist
 - (C) Symbolist としての Thoreau

Thoreau's *Walden* については極めて多くの語るべき事があるように思われながら、同時に何も語るべき事がないような気がする。之は明かに矛盾であるが、それは一体どこから生じてきているのか。それは *Walden* そのものの表現が矛盾に充ちているからである⁽¹⁾。ある事について語りながら急にその反対の事へと移る。この矛盾した表現は、彼の思想が矛盾しているからだろうか。それとも彼の思想自体は一貫したものであっても、それが表現形式に於ては矛盾した形で現れてくるものなのか。それともこのように思想として捕える事が誤りで、単なる美学的 essay を書いたのか。そもそも思想と文学をはっきりと2分する事ができるのであるか。我々は前者の側に重きをおけば、その論理形式の精密さにどちらかといえば傾き、後者の側に重きをおけば、そこから発散する情緒の密度にどちらかといえば傾く。しかし美しく語られた思想の書はあってよいし、又論理の全然通じない意味の無い文章は考える事も出来ない。両者に共に要請されるのは、(何を云おうとしているのか)という意味を把握する事である。即ち Jones の言葉を借れば、*Walden* に関して之を人生論的な倫理の書物としてとりあげたものはあまりにも少なかった⁽²⁾という次第であるから、この視点から Thoreau の *Walden* 及び Emerson の *Thoreau* 論を中心に、Thoreau の意企した事が何であったかを裏付けてみたいと思う。従って、技巧そのものを論ずるとすれば、我々はその技巧によって表現された事物と技巧そのものを比較する事によって、その技巧の旨さを比喩とか直喩とか類推とかの形式面から論ずる事になるのだが、Thoreau をこの立場からのみで処理するには彼はあまりにも思想家でありすぎる。我々の眼に映る比喩や直喩のうしろに、どうしてそのような象徴形式を持つに至ったかという彼の意企が問題にされねばならぬ。端的に云えば、それは彼の人生観、世界観を知る事である。本稿ではこの主旨にそって、典型的アメリカ人⁽⁵⁾と評される Thoreau の人間像を浮彫りにしてみたいと思うのである。そしてもし最もアメリカ的であると捉えた Emerson の評語が正しいならば、Thoreau を解明する事によって America そのものの解明もできる事になる。

I Thoreau に於ける矛盾した表現

——価値判断と事実判断、又は男らしさと女らしさ——

Thoreau はどこにその特質があるのか。古来から現在に至る迄、輩出した哲学者・思想家の輩は、自ら信ずる事と、その信念を実行にうつす事は別な事だと考えていた。それが一致していたのは、ギリシャ哲学者の一部の人だけであった。それをいきなり大胆な形で復活したのは Thoreau⁽⁶⁾ である。Thoreau はこの意味に於て、アメリカ思想史に於けるギリシャの哲人を思わせる。この事を哲学的に云えば、何かを信ずるとは何か価値判断の根拠を求めるという事であり、何かを実行するとは何か事実判断の根拠を求めて、その上にのって行為するという事である。新 Kant 学派の Windelband や Rickelt などは、この2つの判断を全く無縁なものとして分離してその上に価値哲学を展開したのだが、アメリカ哲学に於てはむしろこの両者の親近性を揚言する事がその大きな特徴となっている。例えば pragmatism の完成者である Dewey はすべての価値判断を事実判断の脈絡におきかえる事によって説明しようとした。即ち倫理学を経験科学の言葉で完全に置換できるとしたのである。⁽⁷⁾ 又、Pragmatism の創設者であった Peirce は、科学の方法が信念の確定をなすのに最も有効な方法であると述べる事によって、abductive に科学の方法（事実判断）と信念（価値判断）の一致を信じている。事実、Emerson が Thoreau を批評する時の根拠もここにあるのではなからうか。何故なら Emerson は Thoreau の本質を ‘to reconcile his practice with his own belief’⁽⁹⁾ と述べているからである。Thoreau に於て、私は既にその表現の paradox に注意を喚起したが、この paradox の存在こそ、この2つの判断の分離と、同時にその調停を意図した表現であるとみる事ができるのではなからうか。つまり結論を先取すれば、Thoreau に於ける表現形式の不思議な矛盾は、概ね2元的である。ある時は彼は理想を述べる。それはまさに彼が Emerson 流の transcendentalists の一派である事を十分に領かしめるような、天上雲に聳えるような理想である。と同時に次には逆の極めて些細な事実を女々しくくどくどと述べる。Cahen⁽¹⁰⁾ 流に云えば眠は天上をみて足は地面についているのである。私は前者の理想主義に彼の価値判断が現れているし、後者の現実主義に彼の事実判断が現れているとみたい。それでは、アメリカ思想史の特徴であるこの価値判断と事実判断の調停の実験は旨く行われているのであろうか。私には之が惨めな失敗に終わっているように思われ、Emerson も之を認めているように思われるのである。⁽¹¹⁾

次に Emerson は、Thoreau を ‘always manly and able’ とみているのである。男らしい Thoreau とは一体その如何なる部分を指しているのであろうか。男らしさと女らしさに就いてはいろいろ議論もあろうが端的にいうならば、Schopenhauer によると「男は能力に富み (Emerson の云う able) 視野が広く先見の明に優れている。女は能力に乏しく、視野が狭く、日常性にとらわれている。⁽¹²⁾」のである。即ち理想とか価値判断とかいう事は女性にとっては2次的な事なのである。ここに於て Keyserling がそのアメリカ論に就いて述べたところを指摘せねばならぬ。彼によると、アメリカ人はまことに子供の特質を遺憾なく備えているという。つまり子供を理想化しているという事である。この事は、Dewey の教育理論で端的に示されているように、子供の要求する事を拒絶する事はそのまま悪となり、子供の慾求をいれる事はそのまま善につながるという児童中心主義の教育観を導く事になる。その結果 Nearing の指摘するように子供こそ「一番よく知っている」⁽¹⁴⁾ とい

って子供のやる事にすべて親は沈黙し、子供は自分の気まぐれに両親に従わせようとするよ

うになるのである。つまり Nearing いうように、「親の権威が失われているというよりも、真面目な義務感や責任感が家庭に欠けている。」⁽¹⁴⁾ という事である。とにかく我意を通す事こそ善なのであるという考であり、価値は desire そのものであるという考えであり、圧制者はすべて悪であるという思想である。

単に以上の指摘にとどまるなら、それはアメリカ思想一般について云われている見解と大差はないが、Keyserling はこの事から unique な結論をひきだしている。即ち、アメリカ人は児童を理想化する中に、大人自体が児童の領域における価値を自己の価値とするようになってしまったというのである。ところで児童を最も尊重するのは女性である事を考えると、アメリカ文化の本質は女性的であるという事になるのではなかろうか。

今少し Kaiserling のアメリカ文明論に耳を傾けてみよう。アメリカの文明は彼によると、典型的な西欧文明であり、⁽¹⁵⁾ その本質は現実の世界に於ける成功という事が（つまり事実判断）価値の基準になるような真面目な文明であるという。⁽¹⁶⁾ 'loyalty to conviction（価値判断）and empirical truthfulness（事実判断）are among our highest ideals' ⁽¹⁶⁾といわれる時に、価値判断と事実判断の一致が暗黙の中に推理されているかの如くである。つまり、西洋人は悟性の人というより行為の人であると主張するのである。⁽¹⁷⁾ ところで、このような activity という特性がよく現れているのは、まさに子供に於ける行為に於てであり、その行為は哲学的価値判断より物質的事実判断に傾斜して、たえず両親の判断より自己の判断をよしとする。その結果、適切な子供として存在しえなかった者は一人前の大人になりきる事はできず、換言すれば子供の心がそのまま大人の心となってそれがとりもなおさず国民全体の総意という形をとる。従って国民全体の総意の内容は、子供の集団の総意と本質的に変る事はなく、時として賢明ならざる又残酷なる倫理的判断を結果として招来する事があるが、何せ子供の意企だから、意企そのものに悪意があるわけではないととかれる。⁽¹⁸⁾ 私のみるところでは、このような諸特徴は男性的というより極めて女性的な特徴であるように思われる。そしてこのような事実判断に傾斜した倫理的判断が individualism と結びつく時、Keyserling は之に対して 'superficial individualism' ⁽¹⁹⁾なる私生活本意を志向するかの如き名称を与え、その結果の見通しについては否定的である。たゞし徹底的に、sceptic に否定的なのではなく、かえってその superficial という事に徹底する事によって内面的な文明を生みだしようと主張しているし、⁽²⁰⁾ 又アメリカの農民はヨーロッパの農民が土地に心身両面から一体化しているのとは異って、利益の獲得という企業価値のみを考えている superficial ⁽²¹⁾な存在者であるという事を主張しているのである。この特徴は土地的地域的でないという点では女性的とはいえないが、収益という現金価値のみを考えている事を考慮すると、そこに価値の世界への要請が不十分であると思われるし、その点からやはり女性的と云えなくもない。そして少くとも Thoreau が *Walden* で行った農耕生活は、東洋の文人的な悠々自適の生活ではなく、計算に終始した実験である事を思うと、Keyserling にはその意企はなかったにせよ、少くとも Thoreau の本質をよく捉えているとは云えそうな気がするのである。その他の諸特徴をとらえてみてもここに Keyserling のあげた票識はそのまま鮮かに Thoreau にもあてはまるものが多いように思われる。子供の如き原始的な我意をとおす事 Thoreau にまさる人はいないのではないか。そしてその子供というものが、女性の最大関心事である事を考えると、Thoreau は女性的であるとも云えよう。我々はこの事と、Emerson の定義した男らしさ——即ち Thoreau は男性的であるという事をどう組み合わせ

たらよいのであろうか。この問題は後にするにしても、少くとも次のような事が本節のしめくりとして云えるのではないかと思う。Thoreau の表現形式にはたえず2元論的な矛盾がみられる。その一方は創造的な未来への指針としての価値判断の原理であり、他の一つは非創造的、日常的な現在への密着の姿勢を願にとる事実判断の原理である。更に前者は、Emerson のとく男らしさを示すものであり、後者は Nearing や Keiserling のとく女らしさを示すものである。そして Thoreau の課題は Emerson のいうようにこの両者を調停する事にあったのだと。

Ⅱ Thoreau に於ける矛盾した表現の現象学的形態

私が前節で提唱した図式に従って *Walden* の構成を裏付けてみたいと思うのである。それに当って、既述の如く私は一応美学的な approach でなく、純粋に人間学的な approach を試みたい。Thoreau は美を求めて森の中に定着したのではなく Emerson の云うように真実を求めて定着したのであるとすれば、それは森の中だけで食って寝るという自立の生活をやるという事だけではなかった筈だ。それだけの事なら、ただ一つの Stephen Crane 流の *An Experiment of Misery* にしかすぎぬ。実験とはすべてそれによって何事かの結果が生ずる事を期待しているのである。生活自体に密着してそこに意義を求めるのは現実的女性的な次元である。Thoreau は生活自体に一応密着はしていたが、更にそれを超克した次元に於て何かを行う事を意図していたのではなからうか。この前提にたつて、私なりの構成に組みかえて、Thoreau の辿った足跡を考察してみたい。

まづ我々人間は物質的規定性の限界の中で始めて意志の自由を持ち得る。従ってまづ、(A) 経済 が自立しなくては、我々の精神生活すら充実せしめる事はできない。この章を、Thoreau が何よりも一番先にもってきた事は十分に意味のある事である。次にその経済の基盤にたつてどのような (B) 生活 つまり衣食住を送ったか、又生活とは Aristoteles 的に云うと、共同体の中で暮らす事であるが、そもそも共同体に於ける個人についてどう考えていたか。つまり (C) 孤独と社交性について吟味しなければならぬ。さて以上の生活上の条件が充たされたとして Thoreau が実際の生活の上で行った事はそもそも何であったか。それを (D) 読書と科学としておさえたい。最後に之等の現象的形態の背後を貫く、backbone として (E) 彼の倫理を考えたいのである。本章では (A) — (E) の順に従って考察したい。

(A) 経 済

理想とするところは家計簿的な日常経済ではない。物の価というのは「人生の終りに於いて支払わなければならぬものの総称」⁽²²⁾ (E) をいうのであるから、むしろ若い時期には別の有意義な事業、即ち人生の意味について考えるべきである。つまり「金を儲ける為に、生涯の最良の時期を濫費」⁽²³⁾ (E) してはならない。その時期には仮令報酬を得る事に失敗しても「苦心そのものが十分な報酬」⁽²⁴⁾ (E) である事に満足すべきである。ここには日常性の片鱗もない。

ところで現実はいかにない。そこでは上にあげた理想主義とは全く逆の 'his powerful arithmetic'⁽²⁵⁾ が登場して、およそ如何なる世帯じみた女もかなわぬ程に、枚挙にいとまがない程に家計簿をつけ、そして最後には「1年間に6週間働くだけで十分だ。」⁽²⁶⁾ (E) とま

るで20C中産階級の一特徴ともなった part time の主婦のような事を云うのである。

一体この両者をどう調停したらよいのであろうか。その理想を今一度みてみると、それは無為そのものに価値をみいだしているのではない。人生の終期に於ける収支計算では、若い時に価値の問題に没頭しておいた方が割りがいいと云っているだけの事ではないか。そもそも報酬という考え方に固執するがぎり、それは一見形は似ていても本質は東洋的無の思想とは全く異なるといってよからう。問題になっているのはあくまでも有なのである。

(B) 生 活

上に掲げられた経済生活にのっとして、彼は如何なる生活をそもそも試みたであろうか。生活といえば衣食住の事であろう。そもそもこのような生活を選んだのはまづ「生活の根本的事実のみに直面する為」⁽²⁷⁾ (W I) という限界情況の理想主義的な追求があったのであろう。

ところで現実はどうかと云えば、Emerson は Thoreau の云った言葉として 'they make their pride in making their dinner cost much — I make my pride in making my dinner cost little'⁽²⁸⁾ を引用する。つまり何でも安くきりあげるのだけが自慢という事になる。具体的にはまづ「衣」からみると、*Sartor Resartus* 的な「人格と同化して不可分になっているような衣服」⁽²⁹⁾ (E) こそ最も必要な最低限のものであり、従って、人格として仕事を⁽³⁰⁾するにあたっては「新しい着物はいらぬ」⁽³¹⁾ (E) し「流行の衣服を着たりする事もいらぬ」⁽³²⁾ (E) ののである。つまりそれは衣服が良心そのものだからである。そして、現実的にはその事をもっと女性的に、「1 着の厚い上衣は2着の薄い上衣と同じように役立つ」⁽³³⁾ (E) 事を発見するに至るのである。食でも同様で「何事でも単純化せよ。1日に3食する代りに、1食にせよ。」⁽³⁴⁾ (W I) と理想を述べた後で、例によって更に具体的に「パン種のような基本的な物さえ無くっても食っていける。」⁽³⁵⁾ (E) 事を発見したり、料理は「食う事よりも、むしろそれを自分で料理する事に価値がある。」⁽³⁶⁾ (H L) と日常性に頹落するのである。最後に住ではどうか。例によって最も優れているのは「極めて軽便な家」⁽³⁷⁾ (E) のみであって、その家も食の場合と同じように「建てる事に楽しみ」⁽³⁸⁾ (E) が生じ、その結果できた家は隙間だらけのぼろぼろの家という事になるのである。そこでこの物理的には不健康きわまる家を早速、「家の本質は精神的なあたかみにある」⁽³⁹⁾ (E) といって思考範疇を非理論的にすりかえたり、隙間がある為に「室内の空気は外気と同じように新鮮であった。烈しい雨の日でも、家の内にいるのと外にいるのとは大して違いはなかった。」⁽³⁹⁾ (W I) と痩せ我慢を云うのである。つまり私のみるところでは、賤屋なればこそ自然と密着しておられるとでもいいたいのであろう。

ここでも理想と現実との乖離は甚だしい。そもそも Thoreau は生活の根本に直面する為に簡素な生活を選んだのだといっているけれど、どうして簡素な生活がそのまま生活の根本問題と密接に結びつくのであろうか。生活の根本問題と云う事の解釈にも由るが、共通部分の多い事は認めるにしても決してそのまま等しくはならない筈である。ある人は豪華な生活を営んで、いなかえってそれ故に生活の根本問題に直面するかも知れない。Thoreau の定立を厳守するなら、およそ意味を探究する学者・芸術家などは目を覆わんばかりに貧しくなくてはならない。むしろ真の簡素という事は、実際にそういう生活を営みながらも、それを意識していないという事ではなかろうか。自分は簡単な衣食住を行っているといって自慢する人より、実際それを実行していて1回もそれを意識せず人から云われて始めて気付く人の

方がより簡単な生活を送っているのである。サイバネチックス流に機械のできる事はすべて機械に任せる事によって複雑な生活は簡素になりかえって日常雑事以外の意味のある仕事に従事できるという思想もあるのである。衣食はともかくとして住についての意見は全く虚勢であり、この隙間風の入る掘立小屋と沼地の湿気の為、Cahen のように肺病⁽¹⁰⁾になって果てたに違いないのである。

(C) 孤独と社交

Thoreau の孤独は気質的なものもあったろうが、もっと真剣なところもないではなかった。「社交はあまりにも安価なもので、互いに反省している暇がない為に、新しい価値は持たない。」⁽⁴⁰⁾ (Sol) とといた Thoreau は確かに社交という習俗の無意味さをついていた。この社交と云う言葉を、mass media とおきかえたら現代でもそのまま通用するであろう。こういう社交を求める者は、老人とか臆病な者つまり生きたまま既に死んでいるような連中⁽⁴¹⁾であって、「死の恐怖から逃れる為に」⁽⁴²⁾ (Vis) 社交を行っていたのである。だが彼は生の意義に目覚めて、自らの意義を発見する為に「自らの精神を集中する為に」⁽⁴³⁾ (Sol) 孤独を求めたのであった。そしてきっぱりと「新しい報道はすべて雑談でくだらぬ。」⁽⁴⁴⁾ (WI) と今日でいう mass media の世界を否定したのである。

ところがその舌の根も乾かぬ中に Thoreau は友を求める。「村へでかけて、人々の口から口へ、新聞から新聞へと無駄話を聞くのは、それが断片的に耳に入るのなら、自然現象と同じように精神を爽やかにするものだった。」⁽⁴⁵⁾ (Vil) と人なつっこい態度をとるのである。そして彼のお眼鏡にかなった真の人格者は「永久に死ぬ者であるとはどうしても思えない。」⁽⁴⁶⁾ (FIWV) と Goethe の如き死生観を述べて讃美をおしまない。

この乖離はどう解釈すべきだろうか。「すべての人に対して否という勇気を持った為に、友が少かった。」⁽⁴⁷⁾ という Emerson の指摘は彼の男性的な孤独の一面を表わしている。しかし、Thoreau は真に孤独をそれ自体の為に求めて楽しんでいたような Wakefield 的な人ではない。まさに彼に接した人は 'I love Henry but I cannot like him.' というより他になかったであろう。この Emerson の寸評の中には、彼と面すると（何かしてあげずにはおれない人）というような意識を持たせる、彼の女性的な孤独の一面を指している。即ち倫理的な善悪の判断は like で、情緒的な愛憎の判断は love で示されていると思うのである。いいかえるなら男性的側面は風上におけぬが、女性的側面では実に愛すべき男であるという事になる。一体この2面性をどう解釈すべきか。

(D) 読書と科学

では以上の如き生活の諸条件に服しながら、果して彼は何をなしたのであろうか。何かをなす為に彼は Walden の森にきた筈である。それは明かに文明に疎外されない、自己の知恵の本来的な在り方を自覚する為であった。その為にはすべてのものを自己の眼⁽⁴⁸⁾でもって観察する事であり、「誰でももう少し熟慮したら皆本質的に学者や観察家になる。」⁽⁴⁹⁾ (R) 事なのである。即ち Delphi の神殿に掲げられた（汝自らを知れ）という神託をそのまま、Thoreau は実行したのである。その為の手段として彼が選んだのは読書であって、それによって彼が期待しているのは主体的なる「意味の表現」⁽⁵⁰⁾ (R) である。意味の表現が現われているのは、単に日常的で一時的な話し言葉の中ではなく、「書き言葉の中にしかない。」⁽⁵¹⁾ (R) ののである。更にもっと徹底して、書き言葉さえ結局は有限的なる人間の日常的なる使用に基づくのだから、その手段をもってしては、真実に到達する事はできぬとして「すべて

目に見えるものをそのままに摂取するという訓練が必要」⁽⁵¹⁾ (Sou) とされ、それは象徴的には万物の発する音を心静かに聴くという、いわば現象学的態度となった。神秘家 Emerson がこの態度に心から賛意を示したのは極めて尤もな事である。何故なら Emerson の態度こそ、「事物の中に精神の印をみつかる」⁽⁵²⁾ ことに他ならなかったからである。

しかし、このような価値判断の重要性を力説しながらなおも、例によって固く日常性の枠の中に強く閉じ籠もる。彼は「Concordこそ世界の中心であり、従って Concord にある植物・動物は世界の植物・動物の代表であり、Concord に於ける事件は世界の事件の反映である。」⁽⁵³⁾ と考えた。このような自己中心性は女性や幼児にのみみられる特徴である。そしてその観察を 'patience' という美德で行った⁽⁵⁴⁾ というのであるが、この美德こそ又女性の美德と考えられるものである。

ところでこの教養から果して彼は何を得たのか。つまり人間とは故意に接触を断っていたのだから、直接の目的としたところの自然との接触によって何を得たのか。彼の自然に対する態度は一見極めて戦慄的である。例えば「動物をたべてはならぬ。私の同情は人間のみならず動物にも向けられる。」⁽⁵⁵⁾ (HL) の前提より始って、肉食禁止をとくのは領ける⁽⁵⁶⁾ にしても、この Schweitzer 流の生命の畏敬という観念に到達する為であったら生命を傷つけてもよいのである。即ち「例え人道の上からみて反対であったにせよ子供に狩猟させる事は、その子の人間形成の為によい。」⁽⁵⁷⁾ (HL) のである。私のこのとりあげ方にはすぐ反論がでるかもしれない。即ち狩猟へのすすめは単なる比喩にすぎないと。しかし、この比喩の中には、すべての生物は人間の為に神によって作られた存在者にすぎないというキリスト教的思考法の片鱗が覗かれるのではなからうか。つまり彼の全動物・植物・鉱物に対するおしみな愛情はえんえんと続くのであるが、之は単なる同情であって、いわば人間自体の生命価値を認識させる為の手段としているにすぎないのではなからうか。そこで時にはその描写はすでに観察家というより科学者に近く見える。科学者は法則を見いだす人であり、Emerson 流の表現をすれば、その法則の中に倫理を、価値を見いだす人の事である。

ところが又もや彼は科学を拒否して日常性の殻の中に強く閉じ籠もるのである。それを、Emerson は次のように批評する。「彼は自然の(法則的な)意味を決して定義しようとはしなかった。自分のなした観察を the Natural History Society におくる事は決してしなかった。どうしてそんな事をする必要があるのだ? 私の心の中にやきついている事物を私から離してしまったら、それは私にとってはもはや true でも valuable でもなくなるのだ。」⁽⁵⁸⁾ この態度は Kierkegaard を連想させる、明らかに科学を拒否した態度である。科学という以上、それを人の批判に晒して検証をうけるという勇気を持たねばならぬのに、それが無い。自分一人の為の真理というのはきこえはよいが、狭義の実存的態度であり、実存主義一般についてよく批評されるように、真理の普遍性という事が無視されているといわねばならぬ。もしそういう自分だけに専用の真理があったとしたらそれはまさに女性向き・子供向きの真理なのである。Thoreau は自分が一番幸福だと主張しているかの如くであるが、非常に自己中心的で、他にも違った種類の幸福があるかもしれぬという事を考慮していず、従って少くともこの点に関しては非科学的である。

Ⅲ Thoreau 思想の現代的意義

(A) Pragmatism

前章に於て、Thoreau にあっては価値判断で代表される男性的倫理観、事実判断で代表される女性的倫理観という矛盾したものが同等の権利を要求している事情を考察したのであった。だが、ただそのようにいろんな要素があるといっただけなら、人間にいろんな要素があるのは当然の事であって、問題を提起した事にならない。即ちその多様性の中から何か本質を探してこなければ、我々の Thoreau 観は無意味になるであろう。それでは Thoreau の場合、矛盾した2傾向にあまねく顕示されているものは何であろうか。その1つとして私は pragmatism の諸特徴をいくつか拾い上げる事ができると思うのである。ところで pragmatism の特質は次の2つに尽きるとされている。「(1)他の経験的哲学と異って、一つの世界観の哲学という意味をもっている。というのは普通経験的哲学は、感覚的経験によって検証されるもののみを有意味として、価値命題は学問的に取り扱いえぬものとしたのに対し、pragmatism は経験問題の妥当性の基準として utility の概念を導入した事によって価値評価と学問的認識をはじめから区別していない。又(2)人間の行動に対する楽観観がある。」⁽⁶⁰⁾ この2つの特徴はそのまま Thoreau にあてはまる。即ち(1)の特徴はまさに Emerson の指摘した「practice と belief の調停」という事に他ならぬし、Thoreau も「我々は事実だけを見ているのであって、必要なのはさし当って云うべき事であり、理論上いふべき事などではない。」⁽⁶¹⁾ (C) と utility の立場から結論を下しているのである。いな Walden 自体が一つの utility の実験ではなかったろうか。Thoreau ははっきりと、⁽⁶²⁾ 「私は真に必要な限りは、隠遁を実行しようとは思わなかったのに。」(W I) と述べているのではないか。隠遁そのものが徒然草の世界のように目的だったのではない。何らかの価値を生みだすための手段であったのである。ところで手段とは、いつか必ず尽きてその使命が終るという性質をもっている。従って Thoreau もここで十分経験をつんだ時には、この地を去るのである。「私は自分の実験から、少くとも次の一事を悟った。」⁽⁶³⁾ (C) と、「実験」という言葉を使っているのは明らかにこの間の事情をものがたるものである。次に(2)の楽天主義云々については今さら云う返もない。utilify を目指して引き籠もるという考え自体が既に進歩向上を前指にしたものであり、我々は東洋的或いは Schopenhauer 的な隠遁的厭世観をみる必要は全く無いのである。

(B) 倫理的な Pragmatist としての Thoreau

Thoreau が pragmatist であるとしても、如何なる傾向をもった pragmatist なのであろうか。私はそれを彼の倫理的な面に見るのである。Thoreau のたえず心がける事は、ありのままの人間をそのまま肯定する事である。つまり「人間には神性があるなどとはとてもないことである。」⁽⁶⁴⁾ (E) とははっきりと人間を理性的存在者として認める事を拒絶するのである。しかし又、彼は「我々に高尚な性質と比例して動物性が存する」⁽⁶⁵⁾ (H L) 事をも平然と認めるのである。この事は人間を感性的存在者として認めるという事でもない。古来から人間の本質は理性的存在である (Descartes, Kant) とか、感性的存在である (Freud, Marx) とかいろいろその本質が定義されたが、そのような実体的定義は極めて脆いものであり、どのような定義を下しても更に精緻な定義によってとってかわられる運命にある。最も重大な事は body と mind がそのまま結合している事をありのままに認める事ではなか

ろうか。この事を Emerson も 'there was a wonderful fitness of body and mind'⁽⁶⁶⁾ と注目していた。即ち彼は人間に、従って、己れ自身に与えられた如何なる定義にも満足しなかった。(人間とは——というものである。従って汝も——であれ。) というような如何なる命令にも屈しなかった。もし Thoreau が人間の実体的定義のどれかに満足して、それを喜んで採用していたら、とても 'He was a born protestant.'⁽⁶⁷⁾ とは云えなかったであろう。例えば、人間は理性的存在者であるという Kant 的な実体観を肯定するなら、自分は他の人より理性が弱いので倫理的な行為はしようと思ってもできないのであるという逃避ができるであろう。

しかし Thoreau はそれをやらなかった。如何なる実体観をも否定する程 individualistic であった Thoreau は責任を自分で全部ひきうけなければならなかった。自分一人で行為をやる事の重要性については彼は繰り返して述べているのである。つまり「私の眼は、経験で冴え切っているのだ。」(E) とか「学生は自分で基礎をつくりあげるのが最もよい。」(E) とか「最も優れた遊戯は自分で自分を狩猟する事である。」(E) 等と宣言するのである。しかし、もし彼のこの態度が、以上の根拠に基いてすべての人が Thoreau のように Walden の森のようなところにたてこもって実験する事を要請しているのなら、私は大いに Thoreau の倫理性を疑うであろう。例えば私のみところでは兼行法師はこういう傾向がいくらかあるのであって、どこかに自分のような人間の生き方が最も高潔なのだという僻み根性がないでもないが、Thoreau はそういう僻みはない。その事をはっきりと「私はどういう理由があっても、他の人々が私の生活法を真似る事を願わない。」(E) と定式化している。結局それでは Thoreau が述べた倫理とは何であったかということ「真面目に人生を生活する。」(E) 事に尽きるのであった。真面目に生活するという事は勿論「遊興的生活」(E) を指していない事は確かであるが、さりとて「研究一点張り」(E) の生活でもなかったのである。即ち、おそらく Thoreau は Hawthorne の描く *Ethan Brand* のような Intellect の Monster や、又、同じく Hawthorne の描く *Fancy's Show Box* に登場してくる、Mr. Smith のような Moral の Monster でもなかったのである。Hawthorne 流に云えば the heart を失う事、哲学的に云えば、存在の意味を失う事に堪えられなかったのである。そしてこのような倫理主義は結局 Faust 的な努力主義に帰結するであろう。実に苦々しげに Thoreau は「知識と純潔は努力からきて、無智と肉慾とは怠惰からきている。」(HL) と怠惰を非難しているのである。例によって Thoreau は怠惰のよさをも力説している。しかし、既に私がしばしば言及したように、怠惰そのもののよさではなくて、それが何らかの現金価値を生みだすからに他ならない。即ち「このような怠惰な時間というものがあるのは、その時間だけ加算された効果をもたらすからである。」(Sou) のだ。⁽⁷³⁾

(C) Symbolist としての Thoreau

私は前節に於て、彼は人間に与えられた如何なる実体的定義にも満足せず、自己自らの責任に於て自己という人間を極めようとした事を述べた。更に前章に於て彼の男性的性格の側面に彼の価値判断への志向を、彼の女性的性格の側面に彼の事実判断への志向をおいて考察してみたのであった。そして彼にあってはアメリカ思想史の例にもれず、価値判断と事実判断を同一視しようとする傾向がある事をもみたのであった。今ここで以上の data を弁証法的に綜合すればどうなるであろうか。それは極めて簡単である。やはり彼の持っている2つの性格をそのまま認めるという事に他ならない。即ち Thoreau は男でもあり女でもあり子

供でもあって、しかもその何れの特質にも我々は期待しすぎではならぬのである。

このようにみてくれば、Keiserling や Nearing の説得もいくらか色褪せる。つまりアメリカ文明の性格を女性的文化とみる事には無理がある。同様に Puritanism や Emerson を楯にとつて男性的文化とみる事も一面的見方であるとの謗りを免れえない。ひるがえって考えてみると、アメリカ文明を男性文化として捉える見方では、男性文化の方が女性文化よりも優れているという前提が隠されているのではなかろうか。又、アメリカ文明を女性文化として捉える見方では、女性文化にも男性文化に劣らぬ優れた点があるという前提が隠されているのではないだろうか。何れの見方も、人間というものの本質は、生物学的区別をもってして男・女をはっきりと区別できる程には区別でききないという事を忘れていてのではなかろうか。

更にもう一步考えを進めると、私は西洋文明の定式に従って、一応男性的なものに価値的な事物を、女性的なものに日常的な事物を配して論をすすめたが、最近の文化人類学の知見では、このような標識が常に成功するとは限らない事を示している。それどころか、文化人類学的にみて女性は「忌」の対象となる事から（「忌」は「おそれ」に、「おそれ」は「価値」に結びつく）かえって女性を非日常的、男性を日常的と看做す逆の見解もあるほどである。⁽⁷⁴⁾ この見解によれば、家計簿をこまごまとつける行為など最も男性的な行為となる！

それでは我々がなしたところの Thoreau に於ける 2 元性の摘発はすべて無意味だったのだろうか。そうではない。かえって以上の事より、Thoreau に於ける多様性を指摘できるのである。即ち、Thoreau は男でもあり、女でもあり、大人でもあり、子供でもある。それらの特徴をすべて具備している。即ち彼こそ人そのものの代表であり、彼自身が優れた、symbol であるといわねばならない。Emerson の云うように「典型的アメリカ人」なのである。Thoreau の個性そのものがこのような symbol⁽⁷⁵⁾ 的性格を持っていたので、彼の観察したものもすべて symbol の色に濃く染まっていた。Emerson のいうように「すべてのものを宇宙に準え」た結果、「thought も symbol」となってしまった。

ここにおいて symbol とは何か、そして Thoreau の symbol 観は何かについて簡単に考察しておくのは無益ではあるまい。それは端的に云えば、現実と、それを把握する行為の主体者である我々との間に横たわる意味の体系であるといわねばならぬ。Emerson の *Language* に示される symbolism は極めて主観的な allegory の手法による莫然としたものであって、⁽⁷⁶⁾ 一対一の対応を考える科学の世界の形式的 symbolism の厳密さに堪える事はできない。では Thoreau の symbolism は何か。それは既に我々がみてきたように paradoxical expression という事であった。そして、この方法こそ科学の世界の symbolism と、Emerson 流の symbolism の中間に位置して、⁽⁷⁷⁾ ひろく人文科学に於ける意味づけを行う為の手段となりうるのではないか。この世界に於て我々のなしうるのは、対象について自覚的にその意味を要請していく作業があるのみである。

もしこのように Thoreau の symbolism の世界を捉える事ができるなら、もはや之は何を symbolize していると一々具体的な事例として個物をあげる事は妥当を失する事になるだろう。即ち私のみるところでは Thoreau の symbolize しているのは具体的個物の背後にある意味空間なのである。彼は予言的に 20C に於ける人間の阻害状況を symbolize していたのである。

私の小論はここで突然終る。何とならば終らざるをえないからである。というのは象徴作用を真に有効に pragmatism の守則に従って使用しようとすれば、意味の象徴とされた普遍的函数に何かの実体を代入してみなければならぬからである。その函数の X が依然として X である場合には旨く説明できた。例えば *Walden* ほど鮮やかに今世紀の mass media 文化の怖しさを、人間が機械化されて自己のなしている行為の意味を探りえぬという自己疎外の存在状況を予言した書があるうか。しかし、X に何かを代入してみると（というのは、*Walden* のすすめに従って、*Walden* のとくような生活を実際行ってみるとという意味であるが）——それは Thoreau の時代ですら——突如として惨めな事になるのである。つまりあの貴重な実験の結果は何が残ったというのだろうか。それを残酷にも Emerson は次のように述べるのである。‘pounding beans is good to the end of pounding empires one of these days; but if, at the end of years, it is still only beans!’⁽⁷⁸⁾ 即ち主旨は判るが、結果は好ましくないのであった。だからこそ「このようにして、森林の中における私の 1 年目は終わった。2 年目も同じことだった。そこで遂に私は 1847 年 9 月 6 日に *Walden* の森を去った。」⁽⁷⁹⁾ (S) のであった。従ってもし *Walden* が価値のある倫理の書であるとすれば、それは失敗の警鐘を我々に啓示しうるからであろう。Cahen がいうように、「*Walden* を礼讃する数千人の読者は、立派な肘掛け椅子にもたれて、電燈をあかあかとともし、暖房装置にぬくまって、読んでいます。あれがこの書物に対する最悪の裁きである。」⁽¹⁰⁾ という批評は、正鵠を得ているかもしれないのである。

註

- (1) この間の事情は次の論文に委しい。

MOLDENHAUER, Joseph J. : *Walden : The Strategy of Paradox* (ed. by HARDING, Walter : *The Thoreau Centennial*), State University of New York Press, 1964, pp. 16-33.

- ① Verbal paradox is to my mind the dominant stylistic feature of *Walden*. (p. 16.)
- ② to dramatize his statement by giving it the general *appearance* of a contradiction. (p. 16.)
- ③ The rhetoric of *Walden* is thus determined by the dramatic relationship between the narrator and his audience. (p. 22.)
- ④ As listeners, we are incredulous, puzzled, shocked, capable of being persuaded. As readers we are delighted by the rhetorical devastation of the listener's premises. (p. 22.)
- ⑤ By nature a dialectical instrument, the paradox is thus stylistically integral to this severely dialectical work. Generally speaking the two large groups of paradoxes reflect the comic structure of *Walden* and its two major themes: the futility of the desperate life and the marvellousness of enlightened simplicity. (p. 26.)
- ⑥ We might briefly note that the Transcendental distinction between what “*is*” and what “*appears* to be” is reflected in the recurrent contrasting of surface and subsurface phenomena. (p. 29.)

以上より判断すれば、paradox は単なる表現の技法ではなく、認識の弁証法 (cf. 岩崎武雄 : 弁証法——その批判と展開——, 東大学術叢書 1, 1957.) の展開の為の、論理的構造である事が判る。

- (2) JONES, Howard Mumford : *Thoreau and Human Nature* (ed. by Harding, Walter : *The Thoreau Centennial*), pp. 80-95.

We have had a small library of books on Nature out of Thoreau; we lack a good book in human nature in Thoreau. 'The science of Human Nature has never been, attempted, as the science of Nature has.' (Jones's quotation is from Thoreau's *Journal* dated the 15th of June, in 1840.) (p. 91.)

- (3) 使用 text は THOREAU, Henry David : Edited, with an introduction, by ATKINSON, Brooks : *Walden and other writings of Henry David Thoreau* : Modern Library, New York, 1950, pp. 3-297.

- (4) 使用 text は Introduction by Atkinson, Brooks : Foreword by McDOWELL, Tremaine : *The Selected Writings of Ralph Waldo Emerson* : Modern Library, New York, 1950, pp. 895-914.

- (5) No truer American existed than Thoreau. (Emerson, *ibid.*, p. 899.)

- (6) He eventually liberated himself, however, from Emerson's influence, and at no time was he taken in by the transcendentalist excess of the Concord group or by the millennial dreams that grew thick as huckleberries of the Concord bushes. The sources of strength in his thinking came rather from other strains ----- an absorption with the Greek classics, (LERNER, Max : *Thoreau : No Hermit*, ed. by PAUL, Sherman, *Thoreau, A Collection of Critical Essays*, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, N. J., 1962, p. 20.)

- (7) A morals based on study of human nature instead of upon disregard for it would find the facts of man continuous with those of the rest of nature and would thereby ally ethics with physics and biology. It would find the nature and activities of one person coterminous with those of other human beings, and therefore link ethics with the study of history, sociology, law and economics. (DEWEY, John : *Human Nature and Conduct*, Modern Library, 1950, p. 12.)

- (8) To satisfy our doubts, therefore, it is necessary that a method should be found by which our beliefs may be caused by nothing human, but by some external permanency—by something upon which our thinking has no effect. (PEIRCE, Charles S. : *The Fixation of Belief*—ed. with an introduction and notes by WIENER, Philip P. : *Selected Writings*—Dover Publications, Inc., New York, 1958, p. 107.)

A man should consider well of them; and then he should consider that, after all, he wishes his opinions to coincide with the fact, and that there is no reason why the results of those first three methods (the *a priori* method, the method of authority, the method of tenacity) should do so. To bring about this effect is the prerogative of the method of science. (Peirce, *ibid.*, pp. 110-111.)

- (9) Emerson, *ibid.*, p. 816.

- (10) CAHEN, Jacques-Fernand : *La Littérature Américaine*, Que Sais-je? N° 407, 1950. (島田謹二訳, アメリカ文学史, 白水社.)

- (11) There was somewhat military in his nature, not to be subdued, always manly and able, but rarely tender, as if he did not feel himself except in opposition. (Emerson, *ibid.*, p. 897.)

- (12) SHOPENHAUER, Arthur : *Über die Weiber, Parerga und Paralipomena*.

Aber es ist auch eine Vernunft danach: eine gar knapp gemessene. Daher bleiben die Weiber ihr Leben lang Kinder, sehen immer nur das nächste, kleben an die Gegenwart, nehmen den Schein der Dinge für die Sache und ziehen Kleinigkeiten den wichtigsten Angelegenheiten vor. (Kap. V.)

ist das Weib, in Folge seiner schwächern Vernunft, weniger teilhaft: vielmehr ist dasselbe ein geistiger Myops, indem sein intuitiver Verstand in der Nähe scharf sieht, hingegen einen engen Gesichtskreis hat, in welchen das Entfernte nicht fällt; (Kap. V.)

- (13) KEYSERLING, Count Hermann: *The Travel Diary of a Philosopher*, translated by REECE, J. Holroyd, Volume Two, Harcourt, Brace and Company, New York, 1926.

- (14) NEARING, Helen and Scott, *Social Decay in the United States in USA Today*, Social Science Institute, 1955.

Even more disastrous than the cult of violence which dominates the lives of children in the United States is the shibboleth which has captured the imagination of American parents, that "the child knows best."

In a home where "the child knows best," there need be no respect, because there is no authority. The problem in the American home is not so much a question of authority as the absence of any real sense of obligation or responsibility.

Nearing は更に、米国海兵隊の slogan である "Hurray for me, to hell with you." を引用して、大人になつても子供っぽい性格がぬけきれないと断じ、之がアメリカ社会を破滅に導くと迄極言している。

- (15) The youngest and most typical Westerner, the American, is the most sincere of all human beings; this redeems his lack of culture. (Keiserling, *ibid.*, p. 309.)

- (16) the significance and peculiarity of modern Western culture may be defined exhaustively by one concept: it is the culture of sincerity. (Keiserling, *ibid.*, p. 307.)

- (17) We Occidentals are not men of understanding, but men of action. (Keiserling, *ibid.*, p. 312.)

- (18) We are materially than spiritually minded, because we have not yet got beyond the period of physical growth; we are materialists as children are. For this very reason our energy is chiefly expressed in a blind desire for activity. If I lived longer in this country I too would develop enterprise; my spirit would become more and more embodied in matter, and the idealism of the philosopher would be changed to that of the *conquistador*. (Keiserling, *ibid.*, p. 284.)

Of course, sometimes the effect is very comic when so immature a nation assumes the habits of a grown-up one: but I have never yet seen a boy who did not deem himself more wise than his parents. The foreign politics of the United States are schoolboy politics, their poetry is the romanticism of an upper form. And that is what it ought to be at present; the individual who was not a proper boy never matures into a man. (Keiserling, *ibid.*, p. 285.)

In America the mass judge just as boys judge in moral questions: primitively, linking everything together, lock, stock and barrel, with only a few simple assumptions; to this extent their judgments are often unwise and generally cruel, but they are hardly ever altogether wrong. (Keiserling, *ibid.*, pp. 285-286.)

- (19) The more inventive we are, the more superficial we become, and if we should continue in this evolutionary direction we might come to a bad end. (Keiserling, *ibid.*, p. 271.)
- (20) 例えば, The Lutheran attitude of religion is strangely superficial: nevertheless, from it, or within it, the profoundest mental culture of Europe has originated, (Keiserling, *ibid.*, p. 313.)
- (21) In the United States this profession of farming is regarded with equal justice merely as one industry among others; if agriculture means nothing but that money can be earned by it, then earning money exhausts its significance. Therefore, the American farmer does not stand on a higher human level than the industrialist does in the whole world, and this means that as a type he is completely superficial; (Keiserling, *ibid.*, p. 324.)
- (22) *Walden* からの引用の章名は次の略記号で示す。
 (E) Economy (WI) Where I lived, and What I Lived For (R) Reading (Sou) Sounds (Sol) Solitude (Vis) Visitors (Vil) The Village (HL) Higher Laws (FIWV) Former Inhabitants and Winter Visitors (S) Springs (C) Conclusion
 本文中の訳文は冗長に流れる為、その意味のみを伝える事にし、原文は註のみに於て完全な形で収録する事にした。
 and the cost of a thing is the amount of what I will call life which is required to be exchanged for it, immediately or in the long run. (E)
- (23) This spending of the best part of one's life earning money in order to enjoy a questionable liberty during the least valuable part of it. (E)
- (24) my pains were their own reward. (E)
- (25) With his hardy habits and few wants, his skill in wood-craft, and his powerful arithmetic, he was very competent to live in any part of the world. (Emerson, *ibid.*, p. 896.)
- (26) I found that, by working about six weeks in a year, I could meet all the expenses of living. (E)
- (27) I went to the woods because I wished to live deliberately, to front only the essential facts of life, (WI)
- (28) Emerson, *ibid.*, p. 897.
- (29) Every day our garments become more assimilated to ourselves, receiving the impress of the wearer's character, until we hesitate to lay them aside (E)
 It is an interesting question how far men would retain their relative rank if they were divested of their clothes. (E)
- (30) A man who has at length found something to do will not need to get a new suit to do it in; (E)
 If there is not a new man, how can the new clothes be made to fit? (E)
- (31) I am sure that there is greater anxiety commonly, to have fashionable, or at least clean and unpatched clothes, than to have a sound conscience. (E)
- (32) While one thick garment is, for most purposes, as good as three thin ones, (E)
- (33) Instead of three meals a day, if it be necessary eat but one; (WI)
- (34) by which accident I discovered that even this (=yeast) was not indispensable, (E)

- (35) It is hard to provide and cook so simple and clean a diet as will not offend the imagination. It is not worth the while to live by rich cookery. Most men would feel shame if caught preparing with their own hands precisely such a dinner, whether of animal or vegetable food, as is every day prepared for them by others. (HL)
- (36) Consider first how slight a shelter is absolutely necessary. (E)
- (37) Shall we forever resign the pleasure of construction to the carpenter? (E)
- (38) but the spirit having departed out of the tenant, it is of a piece with constructing his own coffin, —the architecture of the grave,— and “carpenter” is but another name for “coffin-maker”. (E)
- (39) It was not so much within-doors as behind a door where I sat, even in the rainiest season. I did not need to go outdoors to take the air, for the atmosphere within had lost none of its freshness. (WI)
- (40) Society is commonly too cheap. We meet at very short intervals, not having had time to acquire any new value for each other. (Sol)
- (41) The old and infirm and the timid, of whatever age or sex, thought most of sickness, and sudden accident and death; to them life seemed full of danger, —what danger is there if you don't think of any?— and they thought that a prudent man would carefully select the safest position, where Dr. B. might be on hand at a moment's warning. To them the village was literally a *com-munity*, (Vis)
- (42) I find it wholesome to be alone the greater part of the time. To be in company, even with the best, is soon wearisome and dissipating. I love to be alone. I never found the companion that was so companionable as solitude. (Sol)
- (43) If we read of one man robbed, or murdered, or killed by accident, or one house burned, we never read of another. One is enough. (WI)
- (44) Every day or two I strolled to the village to hear some of the gossip which is incessantly going on there, circulating either from mouth to mouth, or from newspaper to newspaper, and which, taken in homoeopathic doses, was really as refreshing in its way as the rustle of leaves and the peeping of frogs. (Vil)
- (45) I do not see how he can ever die; Nature cannot spare him. (FIWV)
- (46) It cost him nothing to say No; indeed he found it much easier than to say Yes. (Emerson, *ibid.*, p. 897.)
- (47) Emerson, *ibid.*, p. 898.
- (48) With a little more deliberation in the choice of their pursuits, all men would perhaps become essentially students and observers. (R)
- (49) It is not enough even to be able to speak the language of that nation by which they are written, for there is a memorable interval between the spoken and the written language, the language heard and the language read. The one is commonly transitory, a sound, a tongue, a dialect merely, almost brutish, and we learn it unconsciously, like the brutes, of our mothers. The other is maturity and experience of that; (R)
- (50) A written word is the choicest of relics. (R)
- (51) What is a course of history or philosophy, or poetry, no matter how well selected, or the best society, or the most admirable routine of life, compared with the discipline

of looking always at what is to be seen? (Sou)

- (52) 1. Words are sings of natural facts.
 2. Particular natural facts are symbols of particular spiritual facts.
 3. Nature is the symbol of spirit.

(Emerson, *Language in Nature*, *ibid.*, p. 14.)

- (53) I think his fancy for referring everything to the meridian of Concord did not grow out of any ignorance or depreciation of other longitudes, but was rather a playful expression of his conviction of the indifference of all places, and that the best place for each is where he stands. (Emerson, *Thoreau*, *ibid.*, pp. 904-905.)

The tendency to magnify the moment, to read all the laws of Nature in the one object or one combination under your eys, is of course comic to those who do not share the philosopher's perception of identity. To him there was no such thing as size. The pond was a small ocean; the Atlantic, a large Walden Pond. He referred every minute fact to cosmical laws. (Emerson, *ibid.*, pp. 910-911.)

- (54) The other weapon with which he conquered all obstacles in science was patience. (Emerson, *ibid.*, pp. 905.)

- (55) I warn you, mothers, that my sympathies do not always make the usual *phil-anthropic* distinctions. (HL)

- (56) I have no doubt that it is a part of destiny of the human race, in its gradual improvement, to leave off eating animals, (HL)

- (57) Yet notwithstanding the objection on the score of humanity, I am compelled to doubt if equally valuable sports are ever substituted for these (=hunts); and when some of my friends have asked me anxiously about their boys, whether they should let them hunt, I have answered, yes —remembering that it was one of the best of education, — make them hunters, (HL)

- (58) cf. 鱗田豊之, 肉食の思想, 講談社現代新書, 1967.

- (59) He would not offer a memoir of his observations to the Natural History Society, "Why should I? To detach the description from its connections in my mind would make it no longer true or valuable to me : (Emerson, *ibid.*, p. 906.)

- (60) 岩崎武雄 : 哲学思想. ed. by 斉藤光 : アメリカの文学と生活. 東大教養英語英文学 4, 昭35, pp. 210-212.

- (61) No face which we can give to a matter will stead us so well at last as the truth. This alone wears well.

In sane moments we regard only the facts, the case that is. Say what you have to say, not what you ought. Any truth is better than make-believe. (C)

- (62) I did not wish to live what was not life, living is so dear; nor did I wish to practise resignation, unless it was quite necessary. (WI)

- (63) I learned this, at least, by my experiment : (C)

- (64) Talk of a divinity in man! (E)

- (65) We are conscious of an animal in us, which awakens in proportion as our higher nature slumbers. (HL)

- (66) Emerson, *ibid.*, p. 900.

- (67) Emerson, *ibid.*, p. 896.

- (68) my sight has been whetted by experience; (E)
- (69) I think that it would be *better than this*, for the students, or those who desire to be benefited by it, even to lay the foundation themselves. (E)
- (70) I would not have any one adopt my mode of living on any account. (E)
- (71) I mean that they should not *play* life, or *study* it merely, while the community supports them at this expensive game, but earnestly *live* it from beginning to end. (E)
- (72) From exertion come wisdom and purity; from sloth ignorance and sensuality. In the student sensuality is a sluggish habit of mind. (HL)_{||}
- (73) I grew in those seasons like corn in the night, and they were far better than any work of the hands would have been. They were not time subtracted from my life, but so much over and above my usual allowance. I realized what the Orientals mean by contemplation and the forsaking of works. (Sou)
- (74) cf. 佐藤俊夫：習俗——倫理の基底，塙新書 1，1966.
- (75) there was an excellent wisdom in him, proper to a rare class of men, which showed him the material world as a means and symbol. (Emerson, *ibid.*, p. 902.)
He knew the worth of the Imagination for the uplifting and consolation of human life, and liked to throw every thought into a symbol. (Emerson, *ibid.*, p. 908.)
- (76) 科学の世界の symbolism については URBAN, Wilbur Marshall, *Language and Reality*, The Macmillan Company, New York, 1951 の Ch. XI, *Science and Symbolism: Symbolism as a Scientific Principle* が参考になる。symbolic な表現の前に, literal な表現が前提とされるが, 特に科学の世界では観察可能な実在する個物に関係のある非象徴的知識が必要となる。本稿で私ののべた科学の symbolism もこの非象徴的知識の強い論理的性格を予想している。
- (77) Thoreau was sufficiently tough-minded to resist the systematic allegorizing of nature which Emersonian theory implied; and he placed far greater emphasis than Emerson upon the "shams and delusions" which hinder men from seeing the natural facts themselves. (Moldenhauer, *ibid.*, p. 19.)
- (78) Emerson, *ibid.*, p. 911.
- (79) Thus was my first year's life in the woods completed; and the second year was similar to it. I finally left Walden September 6th, 1847. (S)

Summary

The Study of Paradoxical Expressions in Thoreau's *Walden*

UNOKI, Keijiro

Paradoxical expression is the dominant stylistic feature of *Walden*. And his paradoxical expression is stylistically integral to his poetic, dialectical thought in recognizing what "appears to be" rather than what "is". Analytically speaking, his value judgement is to his manly, able character what his factual, arithmetic judgement is to his womanly, childish character. These opposite characters are combined beautifully in his protestant individualism which, to adopt Emerson's estimate, is thus expressed as "there was a wonderful fitness of body and mind". To emphasize only one side of his mixed characters is equal to misunderstand him, because he was an individual with a code of his, and he was absorbed by the desire of putting much of himself into himself before he crystallized utterly. Thus not only he was the symbol of man himself, but was well versed in the worth of the imagination, so he liked to throw every thought into his own symbol. His symbol is different from the intrinsic allegorizing of Nature which Emersonian theory stressed, also different from the scientific quantitative method which the so-called scientists stress nowadays. His way of thinking is to enlarge the world of meaning, completely different from the literal concrete world, so he can well foretell the miserable destiny of man deprived of all beautiful endowments in this 20th century chaotic world.

本論文は筆者が東大大学院修士課程学生時代に、1964年度の大橋健三郎助教授の講義に、“Pragmatist としての Thoreau” と題して提出した小論を骨子としており、之を“Thoreau's *Walden* の Paradox の意味するもの” と改題加筆して1967年10月8日日本英文学会中部地方支部第20回大会（於名大教養部）で発表したものをまとめたものである。なお、Kaiserling に関する文献に関しては 南山大学大学院博士課程学生加藤紀子氏に借りていただいたもので、ここに附記してお礼の言葉としたい。